

## ドラッカーの魅力

一人は、今日の大転換期の到来を予告した現代社会最高の哲人ドラッカーである。もう一人は、体系としてのマネジメントを明らかにし、今日のマネジメント手法のほとんどを開発したマネジメントの父ドラッカーである。ドラッカーといえ、あたかもこの二人がいるかのようである。いずれも、二〇世紀にあって二一世紀を動かす巨人である。だが、同一人物である。

しかも、著作を手取るならば、一人ひとりの読者が、自分のために書いてくれたことを確信させられる。ドラッカーとは、それぞれのドラッカーである。

この世紀の巨人が、中欧ハブスブルグ家の最後の帝国、人口六〇〇〇万の大国オーストリア・ハンガリー帝国の政府高官の長男としてウィーンに生まれたのが、一〇〇年前の一八〇九年十一月十九日だった。

ドラッカーは、ブルジョア資本主義とマルクス社会主義という二つの経済至上主義に絶望した大衆が、脱経済至上主義としてのファシズム全体主義へ走るのを目の前にし、産業社会は、社会的存在としての人間を幸せにするかを問うた。奇しくも、ドラッカー生誕一〇〇年の今日まさに、われわれが持つ問題意識と全く同一である。

生産手段の大規模化と、同じく生産手段としての知識の高度化のゆえに、社会は組織社会となった。働く人への問いかけも、お仕事は何ですかではなく、お勤めはどこですかになった。好むと好まざるに関わりなく、今われわれは組織社会にある。しかも組織は、生計の資であるにとどまらず、人との絆、自己実現の場である。

その組織の運営の仕方がマネジメントである。

ドラッカーとは社会生態学者である。生態学は事物を命あるものとして見る。部分最適の和では全体最適は得られないとする。それだけではない。生態学は変化を見る。その変化が、世界を変える本当の変化かを見極める。その変化を機会に変える道を見つける。

社会生態学者だからこそ、生きた存在としての組織、社会的機能としてのマネジメントが見える。経済も見える。経営も見える。

ドラッカーの言葉は人の心を動かす。

「自らの成長のために最も優先すべきは、卓越性の追求である。そこから充実と自信が生まれる。能力は仕事の質を変えるだけでなく、人間そのものを変えるがゆえに、重大な意味を持つ。」

ドラッカーとは、読者にとってやさしく頼りになるお父さんである。お父さんだからこそ、今日の苦境下において、転換期のあとの明日のために、今のうちに力をつけ、大いにがんばれと言ってくれる。

2009年2月

上田惇生